

長崎外国語短期大学カウンセリング・ルームの利用状況における 特徴と分析

—1995年度～2000年度までの結果から—

尾崎 啓子・原口 芳博

1. はじめに

昨今、少子化による学生数の減少が注目されているが、大学・短大への進学率は向上しており、学力、高等教育に対するニーズなどの多様な学生が進学しているといえよう。さらに、高等教育機関においては、社会人入学、編入・再入学などの様々な入学制度が整備されつつあり、留学生を含む非伝統型学生の増加傾向も認められる。こうした変化に伴って、学生にとっての大学・短大時代や学生生活の意味がこれまでとは質的に大きく異なってきていることが考えられる。学生相談担当者は、このような学生の変化に対応して、従来の活動以上に柔軟な援助を行う必要がある。

1953年新制大学の発足とともに始まった学生相談は、旧文部省『学生助育総論』を基本理念にして、幾多の変遷を経ながら今日に至っている。学生相談は、広く学生生活上の悩みや問題について、直接・個別的な相談面接を通じて学生個人を援助する営みが基本となる。その対象は、在籍するすべての学生であり、深い悩みや精神的病を抱えた学生への心理療法的関わりに留まらず、成長を促す教育開発的関わりや精神健康の予防的関わりも含まれる。対人関係を学んだり同じ悩みを持つ者同士の対話の機会を設けるグループ・カウンセリング、就職や進路について考える機会を提供するキャリア・ガイダンスなどのグループ活動も、学生相談の重要な活動となっている。

さて、日本学生相談学会が過去の調査で学生相談機関を有していた全国の大学、短期大学、高等専門学校576校の614機関（そのうち短大は111校）を対象にして2000年度に行った学生相談機関に関する調査報告（全体回収率66%、短大は65%、以下、学相報告と略す）によると（2001）、学生相談室、カウンセリング・センターといった学生相談機関の開設は増加の傾向にある。また開室日数、開室時間、カウンセラーの人数ともに増加している。このような全国的傾向が見られる中、長崎外国語短期大学カウンセリング・ルームは1995年度に開設され、現在に至っている。開設当初より、火曜日と金曜日の週2回、1回につき3時間で開室している。1995年度のみ非常勤の医師と臨床心理士が勤務し、1996年度か

らは非常勤の臨床心理士2名が相談担当となった。

開室期間は年度ごとに異なり、1996年度までは4月から10月まで（7月・8月は閉室）、1997年度からは4月から1月まで（ただし、1997年度は7月・8月は閉室、1998年度以降は8月・9月は閉室、11月・12月・1月は火曜日のみで月2回開室）と延長している。

以下に、過去6年間の利用状況を示し、その特徴を検討する。

2. 利用状況

表1、2、3、4、はそれぞれ来室者の延べ人数、相談内容、性別と実人数、2回以上の継続相談となった者の人数についてまとめたものである。

表1 年度別・月別来室者の述べ人数（単位：人）

		1995	1996	1997	1998	1999	2000	計
4月	1年生	0	1	1	2	18	6	28
	2年生	14	1	0	3	0	3	21
5月	1年生	0	28	15	23	3	6	75
	2年生	11	17	3	5	0	1	37
6月	1年生	27	2	6	5	1	5	46
	2年生	6	7	3	7	0	0	23
7月	1年生	—	—	—	0	4	1	5
	2年生	—	—	—	2	0	2	4
9月	1年生	0	0	2	—	0	—	2
	2年生	2	8	0	—	0	—	10
10月	1年生	0	8	3	3	2	5	21
	2年生	2	9	0	3	2	1	17
11月	1年生	—	—	7	0	0	1	8
	2年生	—	—	0	3	0	0	3
12月	1年生	—	—	2	0	0	0	2
	2年生	—	—	2	3	0	2	7
1月	1年生	—	—	2	0	0	0	2
	2年生	—	—	2	2	0	0	4
計	1年生	27	39	38	33	28	24	189
	2年生	35	42	10	28	2	9	126
開室日数		31	31	34	37	46	44	223
1回平均来室者数		2	2.6	1.4	1.6	0.6	0.7	1.4

表2 相談内容（単位：件、複数回答あり）

			1995	1996	1997	1998	1999	2000	計
修学	退学	1年生	1	2	1	0	1	1	6
		2年生	1	0	1	1	0	0	3
進路	就職	1年生	1	2	1	1	0	0	5
		2年生	5	1	2	2	0	5	15
	進学	1年生	2	3	1	0	1	1	8
		2年生	1	4	0	1	0	0	6
生活	友人関係	1年生	0	3	7	2	2	1	15
		2年生	1	2	0	1	0	0	4
	家族	1年生	0	0	3	2	1	2	8
		2年生	0	0	0	2	1	0	3
	異性関係	1年生	1	1	0	1	0	0	3
		2年生	2	0	0	0	0	1	4
	生活習慣	1年生	1	1	1	1	0	0	4
		2年生	0	0	0	0	0	0	0
心理	性格*	1年生	19	24	21	28	20	5	117
		2年生	18	26	4	8	1	5	62
	対人関係	1年生	0	4	1	0	0	1	6
		2年生	2	3	0	1	0	0	6
	精神衛生	1年生	0	1	1	0	0	1	3
		2年生	2	0	4	1	0	0	7
その他	寮関係**	1年生	0	0	4	1	0	0	5
		2年生	0	0	0	0	0	0	0
	その他	1年生	6	12	1	0	0	0	19
		2年生	5	8	0	0	0	0	13
計		1年生	31	53	42	36	25	12	199
		2年生	35	47	11	17	2	11	123

*「性格」には性格テストの希望者を含む。

**寮での対人関係は、内容に応じて「友人」か「対人」に入れている。

表3 来室者の性別と実人数（単位：人）

		1995	1996	1997	1998	1999	2000	計
男	1年生	0	0	0	0	0	0	0
	2年生	1	1	0	0	0	0	2
女	1年生	20	28	9	25	20	9	111
	2年生	21	28	6	8	1	9	73
計		42	57	15	33	21	18	186
全在籍学生数に対する利用率(%)		5.1	7.4	2.2	6.1	4.9	5.8	5.2

表4 年度別継続相談者数（単位：人）

1995	1996	1997	1998	1999	2000	計
7	9	8	4	3	4	35

3. 利用の特徴と分析

(1) 来室者の述べ人数の月別推移

来室者の述べ人数の月別推移を見ると、各年度とも、その大半が6月までに集中している。特に1年生の来室の多さが目立っている。これは、一般的に新入生が「5月病」といった新生活への適応にリスクを負う時期にいて問題を抱えやすいということと共に、1996年度以降、毎年新入生オリエンテーションでカウンセラー紹介をしており、その際に、カウンセリング・ルームでは困り事の相談だけでなく2種類の性格テストができることを説明している影響が大きいと思われる。事実、この時期の来室者の大半が性格テストの希望者である。しかし、テストの結果解説を聞きながら、短大生活への不安と期待（授業についていけるか、寮生活でうまくやっけていけるか、他）、対人関係の悩み（友達ができるか、他）などをついでのように話していく学生も少なくなく、性格テストの施行は来室のハードルを低くする効果を上げているといえよう。1度テストを受けた後、日を置いて、あるいはすぐ次の週に、今度は相談を希望して来る学生が例年数名いる。テストを介してカウンセラーの人柄や雰囲気に触れ、気を楽にして来談していることが推察される。

一方2年生の来室は、前期の利用が多い年度もあるが、全体の傾向としては月別の変化はほとんどなく、年間を通して一定数で少ない。強いて言えば、後期も相談者が途切れなことが特徴である。これは、1年生の時にテストを受けた者はそのニーズが弱いため実質的に来談者数が下がることと、就職や進学、留学などの進路選択を控え、真剣に悩む機会が増えることが理由として考えられる。

(2) 年度別来室者数の推移

年度別来室者数の推移では、1999、2000年度と減少している。ただし、1995年度から漸減傾向にあった在籍学生数が、1999年度に半減し、2000年度はさらに少なくなった事実を考慮すると、年度ごとの利用者数のみでの単純な比較はあまり意味を持たない。平均的に、例年全学生数の1割弱の学生が来室していると考えられる。

なお、今回は表で示さなかったが、1996年度から少しずつ学生に関する教職員との情報交換の機会が増えてきた。特に最近の2年間は教職員に対するコンサルテーションが増加している。多様な学生への対応にあたり、職種の違う専門家同士の協力、連携が、今後ますます重要となるであろう。

(3) 相談内容

学生の相談内容は多岐にわたっているが、各年度を通して、1年生では「性格」（性格テスト希望を含む）、「友人関係」、「進学」、「家族」が多く、2年生では「性格」の他「就職」、「精神衛生」（摂食障害、神経症など）が多い。1年生は身近な適応に関心が高く、2年生では自己の将来や本来的な問題が出てきやすい時期であることがうかがえる。学相報告では、相談内容分類を3つに分け、「勉学・進路」は「勉学、研究、進路、就職、進学、留学、転学部、編入、休学、退学、不登校、留年などに関する相談」と定義、「心理・適応」は「性格、対人関係、精神保健に関する相談」、「その他」は「課外活動、経済生活、その他に関する相談」と定義して、それぞれの数を統計処理している。その結果によると、短大では「心理・適応」の相談が多数を占め、私立学校では「その他」の率が高かった。分類方法が大雑把なため詳細な比較はできないが、本学では「心理・適応」だけでなく、「勉学・進路」の相談が多いことが特徴といえよう。留学や編入学の実績を持つ単科短大という特色がよく表われた結果だと思われる。

(4) 来室者の性別と実人数

来室者の性別と実人数ではほとんど女子のみの利用となっている。在籍者の大半が女子である事実の反映であろう。しかし、女子が大多数の短大であるからこそ、学生生活に問題を抱えた男子学生の動向は把握する必要性が大である。本学には各クラスにアドバイザーが配置されているので、悩める男子は、カウンセリング・ルームに来る前にそれぞれの教員が対応しているか、あるいはいきなり学校に来なくなっている可能性が高い。

(5) 全在籍学生数に対する利用率

全在籍学生数に対する利用率（来室者の実人数で計算）は、1997年度の2.2%以外はすべてほぼ5%以上の高い率となっている。一般に、学生相談室が毎日開室された場合、学生総数の1%程度の利用があればその相談室は機能しているといわれる。本学のカウンセリング・ルームは週に3時間ずつ2回の開室であるから、各年度とも高利用率となり、よく機能しているといえる。この結果を学相報告のそれと比べると、短大の平均学生来談率は5.5%で、1997年度の調査時の4.9%から上昇しており、本学の利用率と概ね同じであった。それぞれの機関の活動の工夫もあるだろうが、悩める学生の増加の可能性と共に、全国的に「相談」が学生にとってより身近で気軽になっている傾向がありそうである。

(6) 継続相談者数

2回以上の継続相談（カウンセリング）となった学生は、ほぼ全員が「入口」は性格テストだった。3～9名と全体に数こそ少ないが、それぞれ深刻な問題を抱え、病院など他機関を紹介したり、年間を通して面接援助を行った者がほとんどであった。

1年時に来談し、卒業まで面接を続けた学生もいた。「性格」「進路」「友人関係」が主な相談内容だが、親子関係にふれる者も複数名いた。

4. まとめ

近年、「大学生のライフサイクル」という観点から、学年によって学生が直面する課題が異なることが指摘されている。鶴田（1997）は、大学生を学年にもとづいて入学期（入学後1年間）、中間期（入学期と卒業期を除いた期間）、卒業期（卒業前1年間）と区分し、それぞれの時期の心理的特徴を以下のように示唆している。入学期は、入学に伴う新しい状況に入る課題と、入学以前から抱えてきた課題に直面する時期であり、高揚感と落ち込みが生じやすい。この時期には、比較的健康的な学生の入学直後の自発的で短期間の来談が多く見られる。中間期は、学生生活への初期の適応が終わり、将来へ向けた選択が次第に近づいてくる時期で、時間をかけて自分を見つめ自分らしさを探求することがひとつの課題となる。スランプや無気力に陥りやすく、対人関係をめぐる問題が生じやすい時期でもある。卒業期は、学生生活を終えて社会生活へと移行する、将来への準備をする時期であり、集中的に心の整理や学生生活のまとめを行い、今まで未解決であった課題に向き合う時期とする。また、その長年にわたる多数の臨床経験から、各々の時期に来談する学生数の割合は、およそ入学期に5割、中間期に2割、卒業期に1割としている。

本学のカウンセリング・ルームの利用状況は、1年生の来談が圧倒的に多く、相談内容や来談動機など、鶴田の挙げる入学期の来談特徴と合致している。2年生の利用は少ないが、対人関係や進路の悩みは深い。本学は短大で入学期の後にすぐ卒業期が来るため、本来、ゆっくりと自分と向き合うべき時間（中間期）がない。あるいは、中間期に位置したままで進路選択という現実直面していることが考えられる。葛藤を抱える間も無く、追い立てられるように学生生活を終えていく学生も少なくないだろう。そういった学生達に対して、どのような関わり方が援助的であるのか。カウンセリング・ルームの活用方法や広報活動の展開については今後の課題であると認識するが、同時に、大学生とは違う短大という学生生活の独自性について、学生期の特徴を研究していくことも重要である。様々な知見を積み重ねることによって、短大らしい学生相談、援助のあり方が浮かび上がってくると思われる。

さらに、学生は、心身の発達からいえば「青年期」に位置する。エリクソン、E. H（1959）によると、大人と子供のはざまにいる彼らの心の発達課題は、「アイデンティティの確立」である。「私は何者なのか」という問いに本格的に取り組む、取り組まざるを得ない時期であり、青年がこの問いを問う時、それは、これからこの社会で大人としての役

割をどう果たしていくか、どんな大人になりたいのかという問いと深く関わってくる。この問いに正解や終わりはなく、一生涯をかけて続いていく課題だが、問いにまつわる不安定さ、迷い、悩みで揺れることは青年期にあっては必然であるといえよう。

現代社会は、経済的、物質的には恵まれているが、彼らは、なるべき大人像が拡散し、将来像を描くモデルが不明瞭という苦難を背負いながら青年期を生きなければならない。せめて学生生活の中で、しっかりと悩める時間を保障し、一緒に考えながら援助できたらと考えている。

今回の報告では、本学短大学生の心理的特徴や傾向を、カウンセリング・ルーム利用に関する過去6年間の数値をもとに検討してみた。電子メディア革命によるコミュニケーションのあり方の変化といった、刻々と動いていく社会情勢が如実に反映していると思われるデータは特には現れなかったが、進路や友人関係といった「学生らしい」相談内容は分類上の区別に過ぎず、一見今までと同じ発達課題を悩んでいるように見えて、悩み方が変わってきている可能性も否めない。筆者は日々の学生相談という臨床の中で、相手の言葉や態度に過敏に反応し、傷つきやすく、人に気を遣う対人関係のありようを示す学生が年々増えてきている印象を持っている。今後は、この印象を形に表す方法を工夫することと事例研究の積み重ねを行っていく必要を感じている。

本学は2001年度より新たに大学と併設となった。さらに多様な学生との出会いを楽しみにしつつ、学生への援助についてどんなことができるか、教職員との連携をはかりながら、考え、実践し、発信していきたい。

参考文献

- 鶴田 和美 「学生期の下位時期に照らした卒業期の特徴」 名古屋大学学生相談室紀要 第9号 1997
- 河合 隼雄 他・編 「学生相談と心理臨床」 金子書房 1998
- 小林 哲郎 他・編 「大学生がカウンセリングを求めるとき」 ミネルヴァ書房 2000
- 山田 和夫 「青少年の現代的理解」 第三文明社 1992
- エリクソン、E. H (1959) 小此木啓吾(訳・編) 「自我同一性」 誠信書房 1973
- 日本学生相談学会特別委員会 「2000年度学生相談機関に関する調査報告」
学生相談研究 Vol.22 No.2 2001